

表現しようとしたことにあるのではなからうか。

善導はこの三心を釈して『観經』の九品くくほんすべてに通じ、さらに定散じょうさん二善に通じるとした。おそらく法然はこれを通仏教的に拡大解釈したものと考えられる。さらに言えば、浄土教の仏教としての正統性を強調すると同時に、その特殊性を念仏行者に理解するように求めたものと言えよう。

●第五節 智具・行具の三心

『選擇集』撰述の七年前に東大寺において俊乗房との問答がなされた記録が残されている（『東大寺十問答』・『法全』六四四頁）。その中で決定往生する三心具足の念仏について智具の三心と行具の三心があると述べられている。『選擇集』撰述以前に三心について自己の見解を示したものとして興味深い。

智具の三心というのは、諸宗修学の人が、経論を拠り所としてそれを解釈して念仏の信を取ろうとするものである。すなわち学問的に念仏あるいは三心を解釈しこの価値を見出し往生しようとして得る三心を智具の三心とし、行具の三心と区別しているのである。

行具の三心とは、一向専修いっこうせんじゆ念仏すれば三心も五念四修も自然に具わるといふことで行が先行して具わるのを行具の三心と言う。法然は

一向に帰すれば至誠心也、疑心なきは深心也、往生せんとおもふは回向心也

〔法全〕六四四頁

と述べている。

法然の立場がこの行具の三心を重視していることは、関連した法語類の多いことからわかる。重視というのはむしろ適当でないかもしれない。もし本当に『選擇集』撰述の前に自己の意識の中で一向念仏に安心・起行・作業のいずれもが自然に具わると言えば、これは当時の仏教界に大きなセンセーションを巻き起こしたであろう。すなわちこれが凡夫救済の根本思想と受け取れるのである。丸山博正先生の指摘（『行具の三心について』・『善導大師の思想とその影響』大東出版社、昭和五十二年）にあるように、善導の三心釈をそのまま受け取ったならば、凡夫往生の許容条件としての三心は非常に厳しいものに見える。確かに称名が易であったとしても三心を具することが難であれば往生はできない。法然が念仏を真に民衆のためのものとしたようにしたならば、必ず解決しなければならない大きな問題であったと想像できる。この『東大寺十問答』が正しければ、法然は五十九歳のときにすでにその答を見出していたことになる。なぜ行具の三心の解釈が成り立つかは丸山先生は本願の三心を挙げている。これについてはあとで検討するとして、今は行具の三心に関連した法語類を挙げてみたい。

三心と云は、一向専修の念仏者の念仏者に成る道を教へたる也。無智の罪人なりとも、皆ことごとく三心を具足して、往生せん事は決定也。故に習知りて一向専修に成人もあり。三心と云名たにも知られ共、一向専修の念仏者に成人もあり

〔十二問答〕・『法全』六四三頁

この言葉は、平易に知具の三心・行具の三心を現した言葉として、注目される。

本願の三心なれば(中略)、いかに無智ならん物もこれを具し、三心の名をしらぬ物までも、かならずそらに具せん様をつくらせ給ひたる三心なれば

〔七箇条の起請文〕・『法全』八二二頁

ここでは、三心の内容を知らなくても本願の三心であるから自然と具わるものと述べている。もちろんこの前提には、阿弥陀仏を憑み、疑う心なく、迎えさせたまへと念仏することが必要である。

たゞこの三心は、この名をたにも知らぬ人も、そらに具して往生し、又こまかにならひ沙汰する人も、返りて欠る事も候也

〔御消息〕・『法全』五八五頁

ここでは、知具の三心について批判的な言葉となっている。この言葉の前には、詳細な三

心の解釈がなされており、一心でも欠けたならば往生はできないと述べている。そのあとで、しかしこのように別々に釈すと難しいようだが、ただ真実の心があつて、深く仏の誓いを憑んで往生を願う心であると言うのである。この意は、三心について詳細に論じたけれどもそれを解釈することが大事なのではなく、どうしたらそれを見ることができかが大事なのであると解釈できる。さらに三心とは決して難しいものではなく、仏を信じていることで知らずに具わってくるものであると強調されるのである。ほぼ同様な文章が『浄土宗略抄』〔法全〕六〇〇頁)に見出される。

さらに次のような言葉が残されている。

心ニ深く救給フト思テ、口ニ名号ヲ唱ヘナハ三心ハ自力カラ具足スヘシ

〔本願相應集〕・『法全』
九六四頁)

タタ名号ヲトナフル、三心オノツカラ具足スル也ト云リ

〔十七條御法語〕・『法全』
四六八頁)

タタヒトヘニ念仏申ハカリニテ、往生シタリトイウコトハ、(中略)ソレハミナシ
ラネトモ、三心ヲ具シタル人ニテ(略)

〔大胡の太郎実秀へつかわす
御返事〕・『法全』五二〇頁)

マタ在家のモノトモハ、カホトニオモハサレトモ、念仏ヲ申モノハ極楽ニウマル

〔十二問答〕・『法全』
六四〇頁)

ナレハトテ、念仏ヲタニモ申セハ、三心ハ具足スルナリ

ほかにも『一枚起請文』などに、行具の三心に関する言葉が残されている。

●第六節 本願の三心

前節でも触れたように、法然は本願の三心ということを強調するのである。これは、丸山先生によれば(「前出」、行具の三心に対する理論的根拠をそこに求めているからである)と言う。

本願の三心という言葉は、『選擇集』撰述の八年前、東大寺における『觀經釈』に出る、法然の思想形成に大きく関与している言葉と見ることができ。

『觀經釈』によれば、「今此經三心、即開本願三心」とあり、「至心者至誠心也、信樂者深心、欲生我國者回向發願心也」(『法全』一二六頁)とそれぞれ対応させている。法然はここで、先に述べた総別の三心の根拠として取り上げている。すなわち本願の三心と觀經の三心が一致するので、三心は本願である念仏にも『觀經』に説かれる諸行にも通じ、ゆえに正雜二行に通じ、九品に通じ、それゆえに、念仏は上上品に通じるという三段論法的理論を展開しているのである。